

# 老年期における喪失経験の受容と適応

下山 晴彦  
(東京大学大学院)

松澤 広和  
(東京大学大学院)

野村 晴夫  
(東京大学大学院)

## <要旨>

老年期には数々の喪失経験が避けられないが、喪失経験への受容と老年期への適応には過去の人生におけるさまざまな重要なライフイベントや転機への対処方略が関与している可能性がある。本研究では、物語論的な立場から、ライフコース上重要と考えられるライフイベントおよび転機についての高齢者の談話を収集し、喪失経験への対処方略を質的研究法によって探ることを試みた。研究1では、高齢者が喪失経験に対して与える意味は、その個人のライフストーリーの主題と深く結びついていることが明らかになり、喪失経験への適応を考える上で自我同一性の果たす役割が重要であることが示唆された。研究2では、数々の転機を超えて自我同一性を維持するためには、自律した自己に則った維持方略だけでなく、関係に依存するかたちで自我同一性の連続性の維持がなされていることが明らかになった。とりわけ、仮想的・霊的な存在との関係性の果たす役割が示唆された。

## <キーワード>

老年期、喪失経験、物語、自我同一性、転機

## 【問題】

未曾有の速さで進むわが国の高齢化にあつては、医療や行政面に加え、心理的側面からの援助の必要性が叫ばれて久しい。そして、病院や高齢者施設では、高齢者に対する心理療法的アプローチが普及の兆しを見せている。それらの心理療法的アプローチは、QOLや幸福感を高め、ひいては老年期の発達課題とされてきた自我の統合を目論んでいる。しかしながら、心理臨床実践の前提として、高齢者がいかに加齢やそれに伴う喪失経験に適応しうるのか、その方略についての知見は十分とはいえない。老年期には身体的能力の減衰や、家族・知人との離・死別をはじめとした喪失経験が避けられない。それら喪失経験への受容と老年期への適応には、過去の人生におけるさまざまな重要なライフイベントや転機への対処方略が関与している可能性がある。

そこで、本研究では、ライフコース上、重要と考えられるライフイベント(研究1)、転機(研究

2) についての高齢者の談話を通じて、その対処方略を探ることを試みた。

## 研究1

### 喪失経験への意味付与過程

—ライフストーリーの主題が果たす機能—

## 【目的】

高齢者の喪失経験を扱った心理学研究では、精神保健の観点から、喪失経験を適応上の危機あるいはストレスフルライフイベントとしてとらえ、有効な対処方略を見出すことを志向するアプローチが長らく中心であった。しかし近年、これまでのように危機・ストレス—対処といった認知行動論的枠組みで高齢者の喪失経験をとらえるのではなく、高齢者が喪失経験に対してどのように意味を付与しライフストーリーが書き換えられるのかに着目する物語論的な枠組みでとらえようとする流れがある。

人が喪失経験を受容する過程において喪失経験に対する意味付与が持つ重要性については、これまで数多く指摘されてきた (Kubler-Ross, 1971 他多数)。そうした研究から、喪失経験に対する新たな意味付与がライフストーリーの書き換えをもたらすと考えられるようになり、喪失経験を受容する過程が後ろ向きの行為であるとは必ずしも考えられなくなった。しかし喪失経験に対する意味付与の重要性に触れられることは多くなっているものの、意味付与のしかた、ライフストーリーの書き換え方についての考察は少ない(やまだ, 2000 など)。

そこで本研究では、喪失経験に対する意味付与過程に関与する要因を探索的に調べることを目的とする。意味付与過程に関与する要因を探索的に調査するにあたっては、個人のライフストーリーに着目する。ライフストーリーとは、生きられた生の経験的真実を他者に対して開示したものであり、ライフストーリーそのものが個人にとっての人生に対する意味付与の集成であるといえる。したがって、ライフストーリーの内容と形式を丁寧に吟味することで、喪失経験に対する意味付与と深く関わっている要因を同定することが可能であると考えられる。

本研究ではまず、高齢者が語るライフストーリーを丁寧に整理しその特徴を明らかにする。その後、喪失経験についての談話を得て、いかなる意味が付与され、ライフストーリーのなかで位置づけられているのかを、ライフストーリーの特徴とのかかわりから考察する。

## 【方法】

### 調査対象者

調査対象者は 1909 年(明治 42 年)に東京都に生まれた A さんで、調査時年齢は 92 歳である。A さんは 7 人兄弟の長男で第 2 子、姉 1 人、妹 4 人、弟 1 人を兄弟に持っていた。A さんは明治 42 年東京都に生まれ、商社に勤める父に連れられて北海道、大連で学童期までを過ごした。その後東京に戻って中学、理科系の専門学校を卒業し、主として技術畑の仕事を歩んできた。27 歳の時に結婚し、2 人の子どもを育てたが、約 2 年ほど前に 58 歳の長男を病気のために亡くしている。A さんが養護老人ホームに入居したのは 3 年前で、それまでは長男とともに暮らしていた。

### 調査期間

平成 13 年 1 月から 5 月までの約 4 ヶ月間にわたって、面接を行った。

### データ収集の手続き

#### 場所と時間

A さんは筆者らの研究調査への協力要請に対して、自発的に自分の人生を語ることを受諾された。A さん自身の希望により、面接は老人ホーム内にある A さんの自室(個室)にて行われた。面接内容は二回目よりすべて録音し(一度目は筆記)、筆者が受けた印象を面接後に記述した。面接は全部で 8 回行われ、各回それぞれ約 100 分から 120 分で、あった。

#### 面接の構造と面接時のようす

面接は 2 段階に分けて実施された。まずはじめの段階として、スタンダードなライフステージ分類であると思われる Erikson の分類を参考に、乳幼児期から老年期までの人生経験について、各ステージごとに談話を得た。各回では、自由にそれぞれの時期について振り返るよう促し、自分の人生がどのようなものであったのか語られた。6 回目の面接で現在までの振り返りと現在の心境を一通り聞き終え、ライフストーリーを完成させた。次の段階として、7 回目の面接において、改めて各ステージにおいてもっとも現在の自分にとって重要であると感じられるライフイベントについての談話を得た。8 回目の面接において、6 回目までに語られた喪失体験について喪失当時の印象と現在の気持ちについて尋ねた。

ライフストーリーを語る時の A さんは、筆者の促しがなくとも積極的にユーモアを交えつつ、詳しく自分の半生を振り返った。筆者はできるだけ話の流れを止めないように、かつ、その当時の時代背景などについての質問を挟みつつ、できるだけ語り手に共感することで、自然に連想が沸くように傾聴することを心がけた。

### 分析手順

本研究は、比較的ゆるやかな構造の面接から得たデータを基に、探索的に A さんのライフストーリーの特徴を見つけ、その特徴から喪失経験への適応方略について仮説を生成する研究である。したがって、データから結果がどのように見えてきたのかを

順序立てて示す必要があると考えられ、以下にその概略を示す。

- (1) 面接場面ではできるだけ状況や心情など、ディテールまで聞けるように、回想を促す態度をとった。
- (2) 面接終了後、その日の A さんのようすや語りのなかにみられた強調点など、非言語的な部分について筆者が受けた印象を簡単に記録した。
- (3) 得られたデータを Erikson のライフステージ毎に分類し、A さんが一番重要であると同定したライフイベントに関連するエピソードを抽出した。
- (4) 人生の各時期における重要なライフイベント及びそのイベントに関連するエピソードを整理し、それらを基に、A さんのライフストーリーの特徴について整理した。
- (5) 8 回目の面接で得た喪失経験についての談話のなかに、(4)で整理したライフストーリーの特徴が反映されているのか検討した。

## 【結果】

### 1. 分析の単位とライフストーリーの整理

先に述べたように、本研究では分析にあたって、Erikson のライフステージ毎に時系列に沿ってデータを整理し、検討している。ライフストーリーの特徴を検討するにあたって出発点としたのは、ライフストーリーを完成させた後に改めて質問した、各ステージで重要だと現在の A さんが感じているライフイベントである。本研究では、延べ十数時間にわたる面接を行ったために、データの量は極めて多い。したがって、ライフイベントという、ある程度まとまりをもった単位でデータを扱うことが自然であると同時に、ライフストーリー全体を見渡す視点を失わずに済むと考えた。また、A さんが同定したライフイベントを基に、関連するエピソードを抽出し整理した (Table1)。

#### ライフイベント

「この時期の出来事で、もっとも現在の A さんからみて重要あるいは印象に残っていることは？」という問いに対する A さんの答えを筆者が一言に要約したものを「重要なライフイベント」として提示した。

#### 関連するエピソード

また、関連するエピソードとは、重要なライフイベントについての描写、その背景となる時代状況の説明、イベントに対する主観的な反応や感情、などに彩られたデータを指す (Table 2)。

A さんが重要なライフイベントとして各ライフステージ上で同定したのは、「北海道での生活」「小学 4 年生の作品展」「チフスでの入院と中学での落第」「飛行機部品の製造・検査に携わる」「カーヒーターの製作」「長男との仕事」であった。A さんは重要なライフイベントを同定する際にはあまり迷うことがなかった。また、A さんが実感を込めて語っていたと筆者が感じていた場面ともほとんど重なっており、違和感はなかった。

Table 1 ライフステージと重要なライフイベント

ライフステージ	重要なライフイベント	重要なライフイベントに関連するエピソード(要約)
幼児・児童・遊戯期	北海道での生活	・それなりに恵まれた生活だった。 ・ニシンで地元の人が石鹸をつくっていたのを覚えている。
学童期	小学4年生の作品展	・小4夏休みの宿題で何でもいいから作る作品展があった。 ・新聞紙を溶かして立体地図を作成した。 ・先生がその作品の出来に非常に驚いた。 ・「なぜこんな話をするのかと言うと、作るのが好きなんだ」。
思春期	チフスでの入院と中学での落第	・チフスがきっかけでの入院が長引き、中学生のときに落第した。 ・人生観が変わった。普通の才能以外のものを持っているのだと励まされ、科学の道を歩むことに。 ・「エジソンに負けない人間になつてやろう」。
成年前期	飛行機部品の製造・検査に携わる	・不良プラグの弁別方法を見つけたことになった。 ・新しい性能のプラグを開発した。 ・「専門学校しか出ていないのに、独特の才能があるんだと認めてもらったんだよ。」
成年期	カーヒーターの製作	・当時の日本車・輸入車には、ヒーターがなかった。 ・米軍の車を見て、工夫して真似て作ってタクシーに取り付けた。 ・「これが売れたんだ。新聞ダネにもなったよ」。
老年期・現在	長男との仕事	・プロジェクターやスクリーンを開発する。 ・長男の勤める会社も自分の製品のおかげで業績が向上 ・「エジソンを超えたいと思つて、20年近くかかって考えた」

Table 2 関連するエピソードの例(思春期)

そういうわけで〇〇中学の4年を2度やったわけだ。ところがその間に人生観が変わった。すずめが憎らしくてしょうがない。すずめはいいなあ、好きなおとこを飛べ。俺は歩くこともできない。  
 今度中学へ戻ったら、こっちは落第している。(中略)何か引け目を感じて。落第生だから。一方で××さんが励ましてくれて、君は普通の才能以外のものを持っているんだからがんばりなさいと言ってくれた。それじゃあ科学の道歩もうと思ったよ。よし、いつもお袋が言っているエジソンに負けないような人間になってやろう。すべてのものに前向きに考えるようになった。

2. Aさんのライフストーリーの特徴

Aさんが重要なライフイベントであると同定したものに関連するエピソードを収集し、それらを基にAさんのライフストーリーの特徴として、「主題の一貫性」「細部の厳密性」「筋立ての論理性」の3点が見出された(Table 3)。

Table 3 Aさんのライフストーリーの特徴

	主題の一貫性	細部の厳密性	筋立ての論理性
逐語内容からの特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発明家としての自分。</li> <li>・創意工夫することの大切さ。</li> <li>・常に何かを作ることに熱中。</li> <li>・充実感や達成感</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年号を正確に伝えようと努力し、また人名についてもフルネームで話す。</li> <li>・当時の社会・経済面の時代背景のなかに位置づけて話す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ある出来事とある出来事とのつながりについて、筋道立てて語る。</li> <li>・話しが前後する際には必ず断りを入れる。</li> <li>・話しが筋道に逸れても必ず戻ってくる。</li> </ul>
聞き手が受けた印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何かを考え付いたときのことを語る際には思い出してわくわくするようす。</li> <li>・僕かしむように話す。</li> <li>・ときに情感を込めて、当時のやりとりを再現して聞かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一生懸命にディテールを思い出すようす。</li> <li>・孫に教えるかのように、丁寧に当時の状況について、現在との違いも含めて説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常に聞き手にとって理解しやすい話の組み立て。</li> </ul>

Aさんのライフストーリーの特徴として、第一に主題の一貫性を挙げることができる。収集したエピソードには、いずれも創意工夫することの大切さや面白さが語られている。また同時に、Aさん自身が幼少期より一貫して自分を発明家として捉えてエジソンになぞらえ、また事実、職業人として数々の製品開発に携わってきたようすが語られていた。このように、Aさんの語るライフストーリーは、一貫した主題の沿ったものとして語られている。

第二に細部の厳密性が挙げられる。年号や人名、あるいは地名について、Aさんは細部まで正確にライフストーリーの中で語った。たとえ有名人でなくとも必ずフルネームを用い、年号についても曖昧な

ときには自作の年表で確認するほどであった。また、歳の離れた筆者に馴染みの薄いことがらについては、当時の社会経済的背景を説明された。

第三に筋立ての論理性が挙げられる。Aさんのストーリーは、出来事の連鎖を極めて筋道立てて語るものであった。また、自分自身の感情や意図を含めて、何が起きていたのかについて聞き手にとって理解しやすいかたちで提示していた。ときに話が脇道にそれても、必ず本筋に立ち返り、話の筋道を見失うことは決してなかった。

3. 喪失経験への意味付与におけるライフストーリーの主題の役割

6回目までの面接で語られたライフストーリーのなかに現れたAさんの喪失経験について、8回目の面接時に喪失経験当時の印象と現在の気持ちについて尋ね、談話を得た。Aさんが6回目の面接までに語った喪失経験は、母親の死と長男の死についてであった。喪失経験を振り返るにあたってAさんは、いずれの喪失経験についても、自らのライフストーリーの主題(発明家としての自分)と関連づけて現在の気持ちを語った。

母の死

Aさんにとって母親は、幼少時からAさんに対して「エジソンのようになりなさい」と言う存在であった(その背景には、事務系の仕事をしていた父親に対する母親の複雑な気持ちがあったのだとAさん自身は推測している)。母の死について語るAさんは、落ち着いた雰囲気、ゆっくりと語った(Table 4)。母の死についての談話に含まれていたのは、物作りの道を歩むことができた自分を育ててくれた母親に対する感謝の気持ちと、その期待に応えることができたのではないかという気持ちであった。

Table 4 母の死についての談話の例

僕としてはね、何をいままでやりがいをもってきたかという、エジソンに負けるなっておふくろに言われたことが念頭にあって、エジソンはね、活動写真、つまり映す機械を作った。でも僕は映し出すほう、スクリーンを作ったんだ。今になって考えるとね、おふくろの念願も通してやれたんじゃないかって思うだ。

長男の死

母の死が予想された範囲内での出来事であったのに対して、長男の死はAさんにとって唐突な出来事であった。Aさんが老人ホームに入居してまもな

くのことであっただけに、Aさん自身、非常に落胆した(Table5)。長男の死について語る際のAさんは、他にないほど辛そうな表情で、明らかに声の調子に変化がみられた。また、長男の死を思い出すのが辛いせいか、急に別の話題への移ることもあった。長男の死についてのAさんの談話に含まれていたのは、先立たれたことに対する予想外の悲しみと、しかし自分が創り出した製品で長男を幸せにしてやったのではないかという思いであった。

Table 5 長男の死についての談話の例

僕はその当時、実物を映し出すようなプロジェクターを、研究所を作って製品化したんだ。息子の勤めていた会社と協力して売ることができて、息子もよこんでねえ。僕もいい製品を作ることができたし、どんどん息子も儲かって。息子が死んでいなくなったら、ほんとはよかったんだが。さすがに亡くなったときは落胆したよ。(中略)。まあそれでも最後まで幸せで死んだだけね、戦死することを思えばね。そこへ行くところのあいだハワイで死んだ水産学校の生徒さんたちはほんとに気の毒だよ。まあ、僕の作った製品でいい思いをさせてやったことがね、まだね。

## 【考察】

### 1. ライフストーリーの主題の一貫性が持つ意味

本研究でAさんが語ったライフストーリーには、主題の一貫性、細部の厳密性、筋立ての論理性という3つの特徴があることが見出された。自我同一性との関わりからライフストーリーについて研究し、ライフストーリーの首尾一貫性 (coherence) の重要性を指摘している MacAdams(1993,1999)は、首尾一貫性の規準として、オリエンテーション、構造、感情、統合の4つのカテゴリーを提示している。本研究でAさんのライフストーリーのなかに見出された3つの特徴は、MacAdamsの提示した規準に沿って考えても極めて首尾一貫した性質を有しており、Aさんにとって自身の半生がきわめて有意味なものとして感じられ、自我同一性が維持されていることが示唆された。

### 2. 喪失経験と人生の主題

Aさんの喪失経験についての談話において特徴的だったのは、ライフストーリーに一貫して語られていた特徴である「発明家としての自分」という主題との関連で、意味付与が行われていた点である。Aさんは母親の死を振り返るなかで、発明家としての自分を育ててくれた母親に対して、その期待に応えることができるだけの製品を自分は世に送ることが

できたのだと考え、感謝の念と安堵の気持ちを語った。一方で長男の死に対しては、突然の死を悲しみながらも、自分が作った製品によって息子を幸せになるように世話してやったのではないかという気持ちを抱いている。

このように、喪失経験についての談話の内容から、喪失経験がAさんの一貫した人生の主題との関連のなかで受け止められ、意味を付与されていることが明らかになった。このことは、喪失経験への意味付与過程において、個人が人生の中核に位置づける主題、ひいては自我同一性が重要な機能を果たしていることを示唆しているものと思われる。

これまで、喪失経験に対する意味付与は、付与される意味を分類したり、文法的な観点から意味付与の作用について考察を加えるという方法がほとんどであった。今回、人生の主題という、Aさんの自我同一性ともいえる要因が、喪失経験への意味付与過程と深く関わっている可能性が示唆されたことで、喪失経験に対して新たな観点からアプローチすることの有効性を示すことができた。

研究1では、喪失経験に対する意味付与過程においてライフストーリーの主題が果たす役割について検討し、喪失経験を受容し適応するにあたって自我同一性が重要な機能を負っていることが明らかになった。では、喪失経験の受容を可能ならしめる自我同一性維持には、どのような方略が用いられるのだろうか。研究2では自我同一性維持の危機をもたらすと考えられてきた人生の転機についての語りから、その方略を明らかにすることを試みた。

## 研究2

転機を越えて自我同一性を維持する方略  
— 仮想的・霊的な存在との関係性に着目して —

### 【目的】

筆者は、高齢者にとっての自我同一性の維持・統合とは、自身の過去から現在に連なる主観的な連続性 (continuity) の知覚と考える。そして、さまざまなライフ・イベントを経て、現有の自己概念とは異なる過去の自己概念を内包しつつも、自己の一貫性を保持し、生活史を時間軸上に結び付け、連続性をもたらすための有効な一装置が語り (narrative) ではないだろうか。語りと時間経験との密接な関係

をめぐる従来の議論を顧みれば、過ぎ去る時間を人間にとって有意義な自己という単一性に変換する働きをするのが、語るという営みであることを Polkinghorne(1988)は指摘し、Ricoeur(1985)もまた、語りの探求が人間の時間経験の理解に通じることを示唆している。

自己の連続性の知覚が、心理的適応の重要な条件であることは、Kaufman (1986)らによって主張され、いずれも加齢とともに訪れる身体的・社会的な変化を経験しながらも、連続性の感覚を得ることで自我同一性を維持していることを調査面接などから明らかにしている。さらに近年では、高齢者が自己の連続性を維持する能力に着目した研究がなされている (e.g., Troll & Skaff, 1997; Bradtstadter & Greve, 1994)。しかしながら、どのように高齢者が連続性感覚を維持しているか、その機構は明らかではない。

本研究では、高齢者が描出する転機を挟み、その前後がどのように結び付けられ、主観的連続性を知覚するに至っているのか、語りの分析から明らかにすることを目的とした。Bruner(1990)は、日々の定常状態に生じた逸脱から回復するために語りが機能し、逸脱としての転機が自己の物語を改編・生成する契機になるという。転機をいかに人生経験の語りに組み込むか着目することで、高齢者の持つ自己の連続性維持の機構が見出され、それはまた、加齢に伴う喪失事態に対処するための原型的語りの存在を示唆するであろう。

## 【方法】

### 調査対象者

養護老人ホーム在住の二人の女性を対象とした。Bさん(83歳)は、病弱な夫との生活を支えるため、結婚後も幼稚園教諭として勤めたり、第二次世界大戦を挟んでは学習塾を経営し、「72歳まで先生と呼ばれていた」。Bさんが61歳の時に夫を、その10年後には一人息子をそれぞれ看取り、現在居住する養護老人ホームに入居して4年が経過している。Cさん(78歳)は、結婚と共に満州に渡り、終戦後引き上げてから離婚した。飲食店を経営しながら娘二人を育て、二人が嫁いだ後に閉店してからは、住み込み家政婦として働いていた。ホームに入居して9年である。

### 調査期間

平成13年2月から5月までの約4ヵ月間にわたって、面接を行った。

### データ収集と分析の手続き

個別面接法によった。面接の場面設定は研究1と同じであり、それぞれ3回ずつ行い、各回約60分から100分とした。面接は対象者の許可を得てオーディオ・テープに録音し、トランスクリプトに逐語的に転記した上で分析した。

まず、これまでの人生で、大きな節目となった転機にあたる出来事について尋ね、同定した。そして、以下に焦点を当てて質問し、転機を挟んだ前後についての語りを得た。なお、対象者の発話中、調査者はうなずき、相づちを打ちながら聞き、発話内容を明確にする必要がある時のみ、確認のための質問を差し挟んだ。

- (1) 転機を挟んだ前後で、調査対象者にとって、変わったことは何か。
- (2) 上記(1)のように思えるのは、なぜか。

分析手続きは、特に上記(2)の理由説明に着目し、転機を挟んだ変化の原因を帰している表現の特徴を抽出した。

### 【結果】

Bさんが挙げた転機は、次の通りである。

- ①出身地からの上京
- ②ラジオドラマの声優として採用
- ③開戦と共に、夫は編集者から軍需工場事務に転じ、転居。
- ④敗戦と共に、物資に困窮。
- ⑤夫、息子との死別
- ⑥老人ホーム入居

自らの来し方を「波乱万丈」と表現しつつ、上記の転機を区切りとするそれぞれの時期が「輝いていた」と語る。そして、最大の転機とみなした⑥の入居について以下のように述べた。

### <老人ホーム入居を挟んでの変化>

今の幸せは、あたくしね、ここに入ったことだと思う。一言でいえば、\*\*\* (ホーム名) のためにあたくしはね、あとう、健康でいられるし、それから、好きなことを自由に、時間が十分にあって、毎日が充実しているっていうことですね  
今、変わったのはね、今ね、あたくしがここに入れていた

だいたから、心が豊かになって、そして、あの、好きなことをやってるってこと。好きなことをやっているから、健康を保てると思いますね

入居により生活満足度が高まったことが繰り返して語られた。波乱万丈なライフコースを経て入居したホームで、Bさんは、俳句や水墨画のサークル活動にいそしみ、居住環境への満足度も高い。また、新聞の読者投稿欄に投稿することを楽しみとし、ホーム外の社会との接点も失わずにいる。そして、現在の高い満足度の理由が、下記の通り語られた。

#### <老人ホーム入居を挟んで変化した理由説明>

ここへ入った、老後をね、ここへ入ったってことが、あたしの、やっぱり神様がね、見てくださったんだな。その、神仏のこと言うと、おかしいんですけどね、やっぱり守られてるんだなと思います。っていうのはね、子どもにも守られ、死んだ子どもにも守られ、夫にも守られ、両親にも守られ、あたし守られてる人、守ってくれてる人、いっぱいいると思ってます。あたしはね日蓮さまでもなんでもないですよ。お父さん、お母さん、夫、子ども、それがみんな守ってくれて、あたしにね、命をね、年を忘れさせて、与えてくれるように思いますね、あたしは、その信念の一言です。

まあ、やっぱりね、あの、なんっていうの、あたしが一生懸命やったことを神様がご褒美にくださって、そして、あの、みんなあたしが見送った、亡くなった、舅、姑、それから、父や母やね、夫や子どもたちに守られてあたしが今生かされてるんだっていうような気持ちがあるんですけどね、ちょっと言い方がちょっと理解していただけるかどうかかわかんないですけどね、そんなようなつもりでいますね

神も仏も一つじゃないですか。宇宙とか、日蓮もすばらしい、キリストだってすばらしい。でも、何だって一つでしょう。他の人も私達の年になると、そりゃそうだねって言いますよ。宗教は一つなんですよ、超越してるんです。

Bさんの幸福な今を支えているのは、老人ホームの居住環境や活発な対人交流といった、現実的な事柄には留まらない。むしろ、上に掲げた語りから、Bさんにとってより本質的と捉えられているのは、過去に死別した家族達の見守る目であり、あるいはまた、「神様」である。特定の信仰を持たないBさ

んではあるが、それは無神論者を意味するわけではなく、特定の宗教を超えたところにある「神様」が、彼女にとっては現実味を帯びた存在であることがうかがえる。

一方、Cさんが挙げた転機は次の通りである。

- ①終戦と共に、満州からの引き上げ
- ②長女の結婚
- ③次女の結婚
- ④四国遍路
- ⑤老人ホーム入居

終戦後、満州から遠く日本まで帰国し、戦後の動乱の中でCさんは結核を患った。夫、舅、姑から、治療に対する協力は得がたく、娘二人を抱えて離婚に踏み切る。その後、屋台や飲食店の従業員をする内に結核は治癒し、自ら飲食店を経営するまでになる。「子どもがあたしを育ててくれたんですよ、きつとね。もし子どもがいなかったら、何したかわかりませんよね」と語るCさんにとって、娘の養育こそが大きな生きる目的でもあり、また、それゆえに生かされていたともいえよう。そして、娘二人を嫁がせたところで、Cさんの人生は絶頂を極め、その幸福感は現在もなお引き継がれている。③の後には、飲食店を閉店し、住み込みで家政婦として働き、時折、孫を連れて海外旅行を楽しむなどしていた。やがて訪れたのが、最大の転機として④に掲げられた一ヶ月に及ぶ徒歩での四国遍路旅である。この旅を挟んだ変化については、次のように述べている。

#### <四国遍路を挟んでの変化>

やっぱりあのう、命に対して達観したっていうか、ああ、もう、やっぱり、お遍路さんじゃなかったかなと思いますね。68の時の。あのう、毎日山の中歩くのよ。山の音聞いて。遍路道っていうのは、山の中ですね。するとね、今でも、ああ、今日も平和に暮らさしていただきまして、ありがとうございます。すってこう、手合わせるわけね、寝る時に、で、朝だったら、今日、一日よろしくお願ひします、お供いたしますから導いてくださいっていうような感じで、あたし宗教家でもなんでもないけれど、そういう心が出てきたっていうのは

(それはお遍路さんをしたから?) ※ ()内は調査者  
したから、うん。だから、なんか、あれだけのことを自分

でできたんだから、なんか、横についてくださるかなあ。

(それは何か、特定の宗教ではなく?)

なんにもない、だから、もう、熱狂的でも何でもありません。  
ただ、あのう、普通の家庭の仏壇があるでしょ。あれは宗教なんでもなくても、あのう、ほら、ええ、朝お茶、仏様にお茶あげなさいとか、これいただいたから、このお菓子あげるときなさいとか、それもう、日常でしょ。その程度ですよ。でも、それがとても大事なことじゃないかなと思うのね。だから、そういう宗教心もなくなったらもう、人間、心が荒れるんじゃないですかねえ。

Cさんは特定の宗教を信仰してはいないが、四国遍路を経て、限りある生命への達観を感じ、さらに現在に至っても、下線部のように「なんか」が自分を庇護するかのよう側にいてくれると思えている。Cさん自身、強調するように、その「なんか」は、特定の神仏ではない。教え諭したり導いたりする強き神仏ではなく、まさに遍路を言い表すのに一般的によく用いられる「同行二人」という言葉の通り、寄り添い、従うような「なんか」を想像させる。

そして、その遍路を挟んでの変化を説明するために、Cさんの語りは、遠く幼少期に遡ってゆく。

#### <四国遍路を挟んだ変化の理由説明>

やっぱり、祖母が、母方の祖母がやっぱり、お遍路さんした。それでよくお寺に連れてもらってたんですよ。あのう、孫でね、孫連れてね、その祖母っていうのはね、ちょっと強烈なのね。あのね、私の母と、女二人と男二人子ども産んで。それで、あの、おじいさんが死んだわけですよ。それで一人になって、で、やっぱり子ども全部、独立した後ね、尼さんになったの。六十、六十ぐらいの時にもう尼さんでした。私がまだ、だから、お寺に連れてかれたのは、あれまだ、学校行ってましたからね。小学校だったか、女学校だったか覚えてないですけど、お寺によく、はい。頭丸めてね、墨染め着て。それで、みなさん、安寿さんって呼んでましたから。あの、小さい庵みたいな家があって、そこであれしてましたから。それがやっぱり、頭にあったような気がしますね。

もうほら、やたらに熱心になって、人を折伏するとかなんとかっていうのあるでしょ、ああいう好きじゃないですね。宗教っていうのは、自分の心だと思ってますから、あたしは

(自分の心?)

自分の心が宗教だと思ってますから。私の主義ですよ。人様はわかりませんよ。自分では、ああ、あたしの心が宗教だな

って思うから、だから、とってまああのう、心がざわめく日もあるし、それからなんか言われると、嫌な気持ちになることもありますが、でも、悪いことしたなって、自分の心にね、それで治っちゃうのね。それで、俳句作ったり、ぶつけてみたり、なんか、そういうことで癒せるんですよね。あたし、幸せだと思うのね。幸せですよ。ぶつけるものもあるわけですよ。人にぶつくと大変ですけど、ここで書きなぐっているのはなんでもありませんから。そういう意味じゃ、幸せだなと思いますね。

遍路という転機がCさんにもたらした変化を説明するうちに、Cさんは、幼い頃に接した祖母を回想する。Cさんは、やはり遍路の旅に出た祖母に自らを重ね合わせた。もちろん、この種の回顧的な語りから、遍路の旅を思い立った当座にどれほどその祖母の影響が大きかったかの信憑性を問うことはできない。しかし、この語りの中では、遍路旅に至る理由を、古く祖母の記憶に求めている様子が見えてくる。

そして、ここでもまた、下線部にある通り、Cさん固有の宗教観が表われている。他人はどのように考えるかいざ知らず、しかしなお、Cさんにはある種の宗教心を日々の拠り所にしていくことがわかる。

#### 【考察】

Bさんが示した大きな転機は、現在居住する施設への入居であり、その前後で生活環境が好転した理由を、過去に死別した家族や神からの庇護に求めた。また、Cさんの転機は、施設入居前の四国遍路の旅であり、Cさんは、それによる人生観・生命観の変化を、幼少期に尼となった祖母、加えて特定の宗旨ではないが、宗教的な存在から説明した。両者とも、転機を挟んでの変化を説明するのに、現実の対人関係や生活環境以上に、物故者のような今となっては仮想的な存在、あるいは宗教的もしくは霊性的存在を強調した点に特徴がある。

これまで、幸福な老いのためには、「自我の統合」という言葉で言い表されるような、自我同一性の再構築が欠かせないと論じられてきた。本研究では、高齢者が回顧する人生の転機についての語りから、自己の断絶の危険をはらむ転機を挟んで橋渡しし、自我同一性の本態と考えられる自己の連続性を維持する機構を明らかにすることを試みた。Eriksonをはじめとした欧米の老年心理学者は、これまで、自

律した自己観に則った加齢プロセスを描出してきた。しかし、それら先行研究の多くが対象としてきたのは、男性であり、また、学者や弁護士を職業としてきた相対的に高機能な高齢者であった。しかし、本研究で調査対象とした二人の女性にとっての自我同一性達成は、自律性の高さだけでは説明が困難なように思える。むしろ、関係に依存した自我同一性という方が的を射ており、また、その関係とは、現実的なものに留まらず、仮想的・霊的な存在との関係に及んでいる。現実的・理性的な関係ではないにしても、そのような仮想的・霊的な関係は、語り手の高齢者本人にとって、真実味を損なっていない。たとい「歴史的眞実」という観点からの妥当性を脇に置くにせよ、彼女達の「物語的眞実」は、語り手、聞き手に十分な説得力と信憑性を持たせている。また、過去、現在、未来を行きつ戻りつしながら転機を語るという営みは、個々の経験相互を関連づけることによって、人生の意味を紡ぐことに通じる可能性を示唆する。すなわち、一群の高齢者は、仮想的・霊的な存在を頼りに、人生の時間軸を縦横に行き来しながら、人生の語りに転機を織り込み、自己の連続性を維持しているのではないだろうか。この種の機構が、どれほどの一般化可能性や、通文化性を有するかは、今後、ライフコースや現在の日常生活の点で多様な高齢者を対象とした調査を展開する必要がある。

#### 【総合考察】

本研究は高齢者が喪失経験を受容し適応するにあたって、どのようなプロセスが生じているのか、物語論的な立場から考察した。研究1では、高齢者が喪失経験に対して与える意味は、その個人のライフストーリーの主題と深く結びついていることが明らかになり、喪失経験への適応を考える上で自我同一性の果たす役割が重要であることが示唆された。そしてその自我同一性は数々の転機を超えてどのように連続性が維持されるのか明らかにするために研究2が行われた。その結果、従来考えられていたような、あるいは研究1でみられたような自律した自己観に則った自我同一性の維持方略だけでなく、関係に依存して自我同一性の維持がなされていることが明らかになった。とりわけ、仮想的・霊的な存在との関係性の重要性が示唆された。

本研究の結果は、自我同一性の重要性を物語論的な立場から明らかにしたことには大きな意義があるものと考えられる。高齢者は自らの半生に対して一貫した主題を見出し、その主題にさまざまな体験を意味あるまとまりとして結びつける基軸としての役割を与えている。この機能こそが、〈私〉とは何かを私たちが問い続ける根底にあるのではないだろうか。そしてそうした〈私〉の問い直しは、一人一人の生という限られた時間軸の中で行われるのではなく、仮想的・霊的な存在をも含む多元的な時空間のなかで行われるのではないかと考えられる。

#### 引用文献

- Baerger, D.R & MacAdams, D.P. 1999. Life story coherence and its relation to psychological well-being. *Narrative Inquiry*, 9(1). 69-96.
- Brandstadter, J. and Greve, W. 1994. The aging self : stabilizing and protective processes. *Developmental review*, 14. 52-80.
- Bruner, J.S. 1990 *Acts of meaning*. Harvard University Press. London. 岡本夏木他 (訳) . 1999 意味の復権. ミネルヴァ書房.
- Erikson, E. H., et al. 1986 *Vital Involvement in Old Age*. 朝岡正徳(訳) 1989 老年期 みすず書房
- Kaufman, S.R. 1986. *The ageless self, sources of meaning in late life*. 幾島幸子(訳) 1988. エイジレス・セルフ 老いの自己発見. 筑摩書房
- Kubler-Ross, E. 1971 *死ぬ瞬間*. 川口正吉(訳) 読売新聞社
- McAdams, D.P. 1993. *The stories we live by: Personal myths and the making of the self*. New York: William Morrow
- Polkinghorne, D.E. 1988 *Narrative knowing and the human sciences*. State University of New York Press.
- Ricoeur, P. 1985. *Temps et Recit*. Edition du Seuil. 久米博(訳). 1990. 時間と物語Ⅲ. 新曜社.
- Troll, L.E. and Skaff, M.M. 1997. Perceived continuity of self in very old age. *Psychology and aging*, 12. 162-169.
- Wells, L.E. and Stryker, S. 1988. Stability and change in self over the life course. In Baltes,

P.B. and Featherman, D.L. (Eds.) *Life-span development and behavior*. 8. 191-229

やまだようこ 2000 喪失と生成のライフストーリー  
ー やまだようこ(編)「人生を物語る」ミネルヴァ書房、77-108